



**Data**

監督・脚本：アリーチェ・ロルヴァケル

出演：アドリアーノ・タルディオーロ / アニエーゼ・グラツィア / ニルカ・チョコヴァーニ / アルバ・ロルヴァケル / アニエーゼ・グラツィア / ニト / シマーゾ・ラーニョ / セルジ・ロベス / ナタリーノ・バラッソ / ガラ・オセロ・ウィンター / ダービット・ベネント / ニコレッタ・プラスキ

## 👁️👁️ みどころ

イエス・キリストの「復活」は有名だが、聖ラザロの復活をあなたは知っている？イタリアでは1982年まで、「小作制度」があったことにビックリだが、ある農村ではその廃止を隠す巨大な詐欺事件があったらしい。

『夏をゆく人々』(14年)でカンヌのグランプリを受賞し、今や「映像の魔術師フェリーニの再来」とまで言われているイタリアの若手女流監督アリーチェ・ロルヴァケルは、それを受けて現代にどんなラザロを甦らせたの？

大人になれば浦島太郎の昔話を忘れてしまうのは仕方ないが、人間の善意をどこまで信じられるかは、いくつになっても大切なこと。さあ、あなたは本作に見る現代版ラザロの生きざまをどう考える？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■ 1981年生れのイタリアの女流監督に注目！ ■

私が星5つをつけて絶賛した、トルコのヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の『雪の轍』(14年)、『シネマ 36』124頁)がパルムドール賞を受賞した第67回カンヌ国際映画祭で見事グランプリを受賞したのが、1981年生れのイタリアの女流監督アリーチェ・ロルヴァケルの『夏をゆく人々』(14年)、『シネマ 36』217頁)だった。そこでは、13歳の少女の“ひと夏の経験”を中心とした自立のストーリーが、日本人には馴染みのないトスカーナ州を中心として栄えたエトルリア文化の伝統に則った生活の中で美しく描かれていた。そのため、私は思わず谷村新二の昔のヒット曲『22歳』や、山口百恵の大ヒット曲『ひと夏の経験』、さらに瀬戸内寂聴の原作を熊切和嘉監督が映画化した『夏の終り』(12年)、『シネマ

31』83頁)等を思い出しながら、比較対照したものだ。

今や、「映像の魔術師フェリーニの再来」とか「ネオレアリズモのヴィスコンティの遺伝子も受け継いでいることが見事に証明された」と形容されている、そんなイタリアの新女流監督アリーチェ・ロールヴァケルが、本作では突然「ラザロ」に挑戦！邦題は「幸福なラザロ」だが、原題は「LAZZARO FELICE」。すると、本作はあの“聖人ラザロ”を主人公にした宗教映画・・・?いやいや・・・。

## ■□■聖人ラザロとは?「ヨハネの福音書」では?■□■

パンフレットには『ヨハネによる福音書』第11章より(抜粋)があるので、それをそのまま引用すれば次のとおりだ。

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロと言った。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」(11:1-4)

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。(11:17)

イエスは、再び憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石で塞がれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、もう臭います。四日もたっていますから」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光を見ると言ったのではないか」と言われた。(11:38-40)

こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどこいてやって、行かせなさい」と言われた。

マリアのところに来て、イエスのなさったことを見たユダヤ人の多くは、イエスを信じた(11:43-45) (引用：日本聖書協会『聖書 聖書協会共同訳』)

## ■□■若者ラザロとは?こんな正直者の働き者がいるの?■□■

他方、本作冒頭にはイタリアのインヴィオラータと呼ばれる小さな村の中で、小作人として働いている多くの人々が登場する。彼らは、丘の上にそびえ建つ、でっかいお屋敷に住む領主(地主)デ・ルーナ侯爵夫人(ニコレッタ・プラスキ)の下で働いている小作人たちだが、その生活ぶりはいかにも苦しそうだ。これは一体いつの時代?ひょっとして中世?一瞬そう思ったが、直後には携帯が登場するので、時代は現代だということがすぐわかる。その貧しい村の中に愛する男女1組がおり、その男は「こんな貧しい村から思い

切って外に出ていくんだ」と張り切っていたが、監督官のニコラ（ナタリーノ・バラッソ）から「そんなバカなことをすれば、残された家族がどんな目に遭うかわかっているだろう」と脅されると、結局あきらめてしまうことに。

そんな村だから全体の雰囲気は暗く陰鬱そうだが、その中でも1人の若者ラザロ（アドリアーノ・タルディオーロ）だけはいつも明るく働いている。そして、働いている間はずっと「ラザロ！」「ラザロ！」と声を掛けられて用事を言いつけられているが、彼は誰に対しても嫌な顔一つ見せず、それに応じ黙々と働いている。決してスピーディな動きではないが、とにかくただ黙々と！村人にとってみれば、これほど何でも従順に言うことに従う働き者がいるのはさぞかし便利だろうが、こんな男、おとぎ話の中ならともかく、現実にいるの・・・？

## ■□■誘拐事件発生！身代金の要求額は？犯人は？■□■

平成から令和を迎える2019年4～5月の10連休中に、『64—ロクヨン—前編』（16年）（『シネマ38』10頁）『64—ロクヨン—後編』（16年）（『シネマ38』17頁）がTVで一挙放映されたのは、それが昭和の終りから平成を迎える昭和64年1月5日に発生した身代金要求誘拐事件を題材としたためだ。そこで要求された身代金の額は2000万円だった。また、『天国と地獄』（63年）での身代金は3000万円だった。しかし、『ゲティ家の身代金』（17年）ではフォーチュン誌によって世界初の億万長者に認定されたジャン・ポール・ゲティ氏に対して、その孫の誘拐にかかる身代金の要求額は何と1700万ドル（当時のレート換算で約50億円）だからすごい（『シネマ42』172頁）。しかし、本作で母親の侯爵夫人とともに町からやって来た美しい息子、タンクレディ（ルカ・チコヴァーニ）が、ラザロを共犯者として計画した狂言誘拐の身代金の額はHow Much？

その額もさることながら、本作で注目すべきは、なぜタンクレディはラザロを共犯者としてそんなことを計画したの？そしてまた、善人であるはずのラザロがなぜ、いとも簡単にそんな計画（犯罪）に乗ったの？ということだ。タンクレディという“変わった名前”を聞いてすぐに思い出すのは、ビスコンティ監督の『山猫』（63年）でアラン・ドロンが演じた青年貴族の名前。同作は4K修復版としてリバイバル上映された素晴らしい作品だった（『シネマ38』未掲載）が、なぜ本作で公爵夫人のバカ息子（？）の名前をタンクレディとしたの？ラザロもかなり変わった男だが、こちらは単に善人で働き者だというだけの単純な男。しかし、タンクレディの方は女領主のバカ息子（？）というだけあって、エキセントリックな変わり者だから、友人など誰一人いないらしい。ところが、そんなタンクレディがラザロに対してだけは、手作りのパチンコを武器として与えて中世の騎士の契りのような儀式を済ませた上、「俺たちは（腹違いの）兄弟だ」とまで宣言したからビックリ！これは一体なぜ？

ラザロはタンクレディの指示通り、タンクレディの身代金を要求する手紙を母親の侯爵

夫人の手に渡ろう動いたが、さて、そんな身代金要求誘拐事件の展開は・・・？

## ■□■小作制度にビックリ！この農村の無知ぶりに唖然！■□■

「先の大戦」に敗北した日本は、降伏の条件として国体の維持＝天皇制の存続を最大限要求したのは周知のとおり。そのため、無条件降伏になったものの、象徴制に姿を変えた天皇制が維持されたのは多分、日本人にとって良かったのだろう。しかし、平成から令和に元号が変わった今、男系天皇に限る前提での皇位継承者はわずか3人になっているから、本気で天皇制の存続を目指すのなら、大改革が必要だ。

他方、1945年8月15日の敗戦を境として、日本は軍国主義から民主主義に大きく姿を変えたとともに、戦前の地主小作制度が廃止され、いわゆる農地解放が行われた。ところが、イタリアは日本と同じ第二次世界大戦の敗戦国だが、戦後も小作制度がずっと続いていたというからビックリ。しかも、それが廃止されたのは1982年というから、かなり遅れている。日本と同様、小作制度の廃止は大変革だから、当然それはラジオ、テレビや新聞で報道されたはずだが、なんとインヴィオラータ村の小作人たちはその法改正を知らなかったというから更にビックリだ。

そりゃ、いくらなんでもあり得ない。きっとそれはアリーチェ・ロルヴァケル監督が本作でラザロの寓話を描くために捻り出した架空のお話。私は当然そう思ったが、本作に登場するデ・ルーナ侯爵夫人による巨大な詐欺事件は1980年代に実際に起きた事件らしい。しかし、1980年代のインヴィオラータ村には、ラジオもテレビも無かったの？小作制度の廃止を領主（地主）が小作人に知らせず、従前どおりの搾取を続けるのが違法であることは当然だが、本作のデ・ルーナ侯爵夫人をみていると、泰然としているからアレレ。それはインヴィオラータ村の小作人たちを騙すのは極めて簡単だと思っているためだが、なるほど、ラザロのような男なら何の疑いも持たないことがよくわかる。しかし、1980年代にここまで情報から隔離され小作制度を続けているインヴィオラータのような村があったとは・・・。

## ■□■農村から都市へ。村人は？ラザロは？■□■

ラザロの“隠れ処”に隠れて、身代金誘拐事件をでっち上げたタンクレディの連絡係はもちろんラザロただ一人。ところが、高熱を押してその任務にあたったラザロが、ある日足を滑らせて深い谷間に落ちてしまったから大変だ。タンクレディとともに野生の狼の鳴き声を真似て遊んでいた時は、狼は遠くだったから良かったが、生死の境をさまようラザロのすぐ側までやって来た野生の狼は・・・？

イエス・キリストの「復活」も、ラザロの「復活」もどこまでホントの話か知らないが、本作の若者ラザロが狼に食われず、死の谷から復活したことは本作を観ている限り間違いない。ただ、浦島太郎がタイヤヒラメの接待を受けて、月日が経つのを忘れてしまったの

と同じように、どうやらラザロが死の谷から復活している間に、世の中は大きく変わってしまったらしい。

急にラザロからの連絡が途絶えたことに戸惑ったタンクレディは、密かに自分に思いを寄せているニコラの娘、テレーザに携帯で連絡を取ったところ、テレーザはタンクレディの身を心配して警察に通報したから、デ・ルーナ侯爵夫人によるあつと驚く村民騙しの巨大詐欺事件が一举に明るみにでることに。日本では農地解放を進める中で、小作農から自作農への転換が徐々に進められたが、本作をみている限りインヴィオラータ村でのそんな転換はうまくいかなかったらしい。つまり、ラザロがインヴィオラータ村で一緒に過ごしていた女の子アントニア（アニェーゼ・グラツィアーニ）やその家族たちは、今や都会の中でそのアカに染まりながら、半分泥棒や詐欺師のような形で、何とか生計を立てていたわけだ。このように長い年月が流れる中、1人だけ浦島太郎のように、昔の姿のまま都会をさ迷い歩いていたラザロが、偶然成長したアントニア（アルバ・ロルヴァケル）とその家族たちと巡り合えたのはラッキーだったが、この変化をいったいどのように考えればいいのか？

そんな寓話はラザロがある日、さらにタンクレディと巡り合えたことによって頂点に達していく。若き日のタンクレディは長身のハンサムボーイだったが、成長した（年老いた？）タンクレディ（トンマーゾ・ラーニョ）は中年（老年）太りもいいところ。さらに、若い時から汗水流して働くことなど到底できなかったが、それは今も同じらしい。その結果、年老いたタンクレディと若い時の姿のままのラザロは、今2人でどんな仕事を・・・？

## ■□■この寓話は面白い！現代のラザロは今どこに？■□■

私は、徳島県鳴門市にある大塚国際美術館で陶板複製画によるカラヴァッジオの「ラザロの復活」とレンブラントの「ラザロの復活」を見たが、それは共に重厚な雰囲気を持った宗教画だった。それに対して、本作のパンフレットにある、ゴッホの「ラザロの復活 - レンブラントを模して」と、ルドンの「ラザロの蘇生」を私は全く知らなかったが、それは前2者とは全くイメージの違う絵画だから、その対比が興味深い。しかして、1980年代に現実にイタリアの農村で起きたという、小作制度を巡る巨大詐欺事件を映画化した本作は、現実の事件の悪質性を示唆しながらも、松本清張の小説のようなリアリズムとは正反対の寓話的な展開に徹しているから、その対比が興味深い。

本作でラザロを演じたアドリアーノ・タルディオーロは、公立高校在学中にスカウトされ、1000人以上の同年代男子の中から発掘されて、本作で俳優デビューしたずぶの素人だが、そのハンサムぶりは一目見れば忘れられないものだ。そして、実は私は彼とそっくりな顔立ちの友人が1人いたから、本作鑑賞中、私はずっとその彼を思い出していた。もっとも、いくら顔立ちが似ていても、性格はさすがに本作のラザロとは大きく違っているのは当然。トランプ大統領が全世界の話題を集めている昨今、実利性の塊のようなトランプ

大統領と正反対で、無欲、ある意味愚鈍ともいえるラザロのような男は、今どき周りを見てもどこにもいるはずはない。しかし、本作のような寓話を見ていると、ひょっとして聖ラザロの現代版はどこかにひっそり暮らしているのかもしれないと考えてしまう。そんなことを考えることができただけでも、浦島太郎の昔話と同じような（？）現代版ラザロの寓話をスクリーン上で表現した本作を鑑賞できたことに感謝したい。

2019（令和元）年5月13日記